

筑波大学学生の正課体育への対応状況

—運動生活階層に着目して—

松下雅雄, 山川岩之助

Attitudes Towards Regular Physical Education

-with reference to sport behavior types in daily life-

Masao Matsushita and Iwanosuke Yamakawa

Abstract

The purpose of this study was to identify the attitudes towards regular physical education of the students with certain sport behavior types in daily life : C-type, A-type, P-type, and S-type defined by Udo(1970)*.

The data on which the study was based were taken from "The Questionnaire on Sport Behavior in Daily Life" which was given to the students of University of Tsukuba in 1981, except the students who majored in physical education. 1268 subjects were available.

The results may be summarized as follows:

1. The students of C-type had consistent attitudes in selection of the subjects in regular physical education, motivations for the selection and expectations to regular classes. But, the students of S-type had inconsistent attitudes in all of the three; for example, although they hoped to take a subject which is in light or recreational sports, they hoped to improve their own health condition and physical fitness in regular classes.
2. The inclinations of hoping to improve sports techniques, to acquire some new experiences and to have joyful experiences in regular classes decreased in the order of C, A, P and S types. However, the inclination of supplying the lack of exercises in daily life increased in the order of C, A, P and S types.
3. The percentage of the dissatisfaction towards the methods of instruction and evaluation in regular classes in S-type students was higher than that in students of other types.

- * C-type — members of sports club in daily life
- A-type — users of sports facilities in daily life
- P-type — participants of sports programs in daily life
- S-type — non exercisers in daily life

〈諸言〉

本学での体育の目的が「運動文化を体験することにより、学生生活を豊かにし、さらに進んで将来の社会生活を充実させる¹²⁾」であることを鑑みると、4年間履修することになっている正課体育（その内容は実技及び講義である）が学生の運動生活にどのような影響を与えているのか、また学生が正課体育を各自の運動生活の中でどのように位置づけているのかを把握することは、今後の正課体育のあり方、授業方法の改善において必要なことであろう。

正課体育に対する学生の態度や意識についての研究^{2,4,8,9,10)}は数々あるが、日常での運動生活状況を階層的にとらえ、それと正課体育との関係などについて報告する研究は数少ない。

浅田¹⁾らは、学生の日常運動生活の状況と正課体育の履修状況および態度を調べ、①日常で何らかの運動活動を行っている者で正課体育での経験が動機となった者は約15%であること、②Club階層は授業に対して積極的であり、運動量の多い種目や新しい体験と思われる種目を履修していること、③Area利用階層は楽しみながら行える種目を履修していること、④Stay階層は4年間の履修制度に対して満足度がひくく、授業にも消極的で、運動量の多くない種目を履修していること、などを報告している。

本研究では、各運動生活階層の正課体育への対応をさらに明確にするために、各階層の正課体育での受講希望科目、受講希望科目と日常での実施希望種目との関係、受講希望科目の選択理由、授業での期待内容、その期待

内容と日常のスポーツで満たされる内容との関連、そして授業内容、指導方法、評価方法への満足度、などについて考察をすすめ、今後の授業方法改善のための基礎的資料を得ることを目的とした。

〈研究方法〉

(1) 対象

筑波大学正課体育受講生の中から各開設科目、全学群（体育専門を除く）の学生に及ぶサンプルを得ることを意図して、2023名（男子1541名、女子482名）を有意抽出し、調査対象とした（なお、一年生は学生生活が短期間のため除外した）。

その結果、男子958名（回収率62.2%）、女子310名（回収率64.3%）、合計1268名（回収率62.7%）の回答を得たので、これらを研究対象とした。

(2) 手続

昭和56年6月の第一週の正課体育授業時に調査用紙を配布し、第二週の授業時に回収するという質問紙法によるアンケート調査を行った。アンケート調査は「運動生活に関する調査」で、内容は図1に示したように①生活意識、②健康、体力、スポーツ経験などの主体的条件、③スポーツに対する対応、④運動生活の全般的傾向、⑤体育事業への対応、⑥正課体育への対応、などで構成されている。

本研究では、特に④と③および④と⑥について筑波大学の大型電算機（SPSSプログラムパッケージ使用）でクロス集計をし、考察をすすめた。

(3) 運動生活階層の分類

本研究での運動生活階層の分類基準は、表

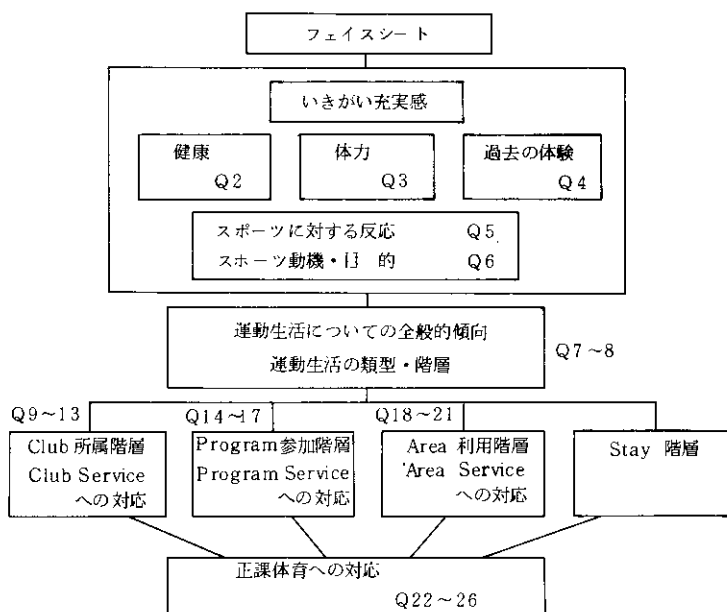


図 1. 運動生活に関する調査の構成
(大学体育研究第 4 報)

表 1. 運動生活階層の分類

運動生活の類型	1	2	3	4	5	6	7	8
体育事業								
体育系の課外活動団体に所属して運動している	○	○	○	○	×	×	×	×
スポーツデーやスポーツ教室などの体育的プログラムに参加して運動している	×	○	×	○	○	○	×	×
自由時間に運動の施設や用具を利用して、自由なやり方で運動を楽しんでいる	×	×	○	○	×	○	○	×
現在は正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない	×	×	×	×	×	×	×	○
	C			P		A		S

C…Club 階層, P…Program 階層, A…Area 利用階層,
S…Stay 階層

(運動生活の類型については宇土正彦, 体育管理学を参照)

1に示すように、宇土¹³⁾の運動生活階層分類のB案に従った。

その結果、Club階層は42%、Program階層は7%、Area利用階層は30%、Stay階層は21%であった。

以後、Club階層はC階層、Program階層はP階層、Area利用階層はA階層、Stay階層はS階層と略記する。

〈結果および考察〉

(1) 履修希望科目について

図2の左図はS階層とS階層を除いた全体の選択度、右図は各運動生活階層の選択度をあらわしたものである。

各運動生活階層で選択度が高い上位3科目は、C階層ではテニス(13%)、ライフル射撃(8%)、バレーボール(7%)であり、P階層ではバレーボール(19%)、ハンドボール(9%)、ゴルフ(7%)、A階層ではテニス(19%)、ライフル射撃(8%)、バレーボール(7%)であり、球技系のスポーツまたは中・高校で経験できなかったと思われるスポーツに高い選択度を示している。しかし、S階層においてはライフル射撃(11%)、ゴルフ(9%)、テニス(9%)、と中・高校で経験できなかったと思われるスポーツにのみ高い選択度がみられる。

C階層、P階層、A階層の選択度を比較すると、特に顕著な差を示すのがP階層のバレーボールとテニスの選択度である。バレーボールではC階層とA階層の選択度が7%であるのに対してP階層では19%と高く、テニスにおいてはC階層の13%、A階層の19%に対してP階層は3%と低い選択度であった。

この結果とハンドボール、ラグビー、バスケットなどにおいて、P階層がC階層とA階層に比べわずかながら高い選択度を示すことを併せて考えると、P階層は中・高校で経験したと思われる球技系で、集団のスポーツを選択する傾向が強いと考えられる。

次に、S階層とS階層以外の全体とを比較すると、S階層がより高い選択度を示す科目としては体操トレーニング、サイクリング、ライフル射撃、卓球などで、反対にS階層以外の全体の方が高い選択度を示す科目としてテニス、水泳、ハンドボール、サッカー、バレーボールなどがあげられる。

これらの結果より、S階層は中・高校で経験している球技系のスポーツを選択する割合が他の階層より低いこと、そしてまた経験していないと思われるスポーツでも他者と直接的に競うことの少ない、一般的に運動量が少ないと思われるスポーツを選択する傾向をもつと考えられる。

表2は「これから最もやりたいスポーツ」と「正課体育で履修したい科目」の選択度を各階層別にまとめたものである。

但し、これらの最もやりたいスポーツでは53種目が調査対象であり、正課体育で最も履修したい科目では開設科目の25種目が調査対象であったが、比較上、両調査項目にあげられた23種目をとりあげた。

この23種目のこれから最もやりたいスポーツとしての選択度の合計は各階層とも60%前後であり、正課体育での選択度の合計は90~95%であった。そのため日常での選択度と正課体育での選択度の双方とも対象とした種目の選択度(%)の合計が同じ母数になるようにそれぞれの選択度を計算しなおした。

全ての階層において、日常でも正課体育でも高い選択度を示す種目はゴルフである。正課体育におけるより日常で行いたいとする方が高い選択度を示す種目は硬式テニスであり、反対の選択度を示すのはライフル射撃とバレーボールである。そしてサッカー、野球を除く球技系のスポーツは日常での選択度より正課体育で選択する割合が高い、という結果がみられた。

S階層についてみると、ゴルフ、サイクリ

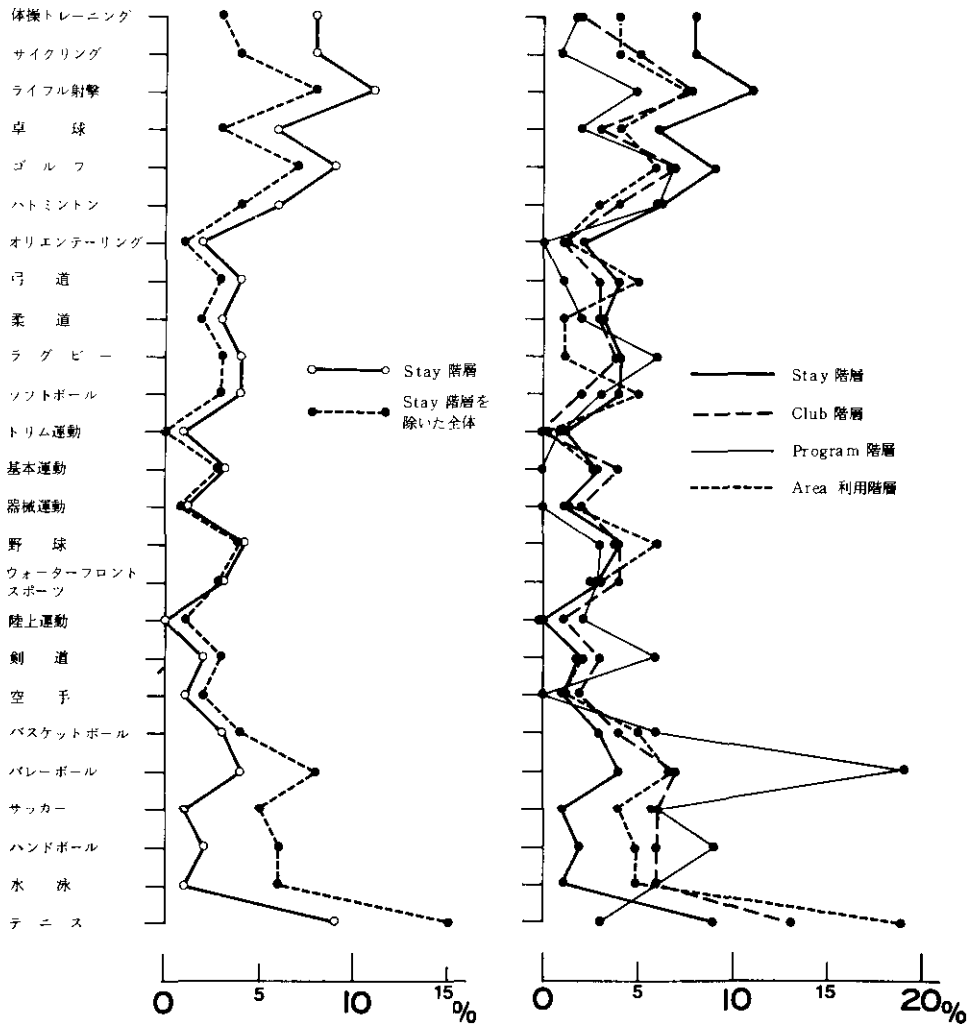


図2 開設科目の履修希望度

ングの選択度の順位は日常でも正課体育においても上位であるが、ゴルフが他の階層でも同様の傾向がみられるのに対し、サイクリングの選択度は他の階層では日常でも正課体育においてもひくい。

また、水泳は他の階層では日常でも正課体育でもほぼ同じような選択度を示すのに対し、S階層では日常での選択度が比較的高いが、正課体育では非常に低い。

これらの結果と図2の左図に示したS階層とS階層以外の全体のサイクリングと水泳の

選択度をみると、この両種目はS階層を把握する上で意味をもつ、と考えられる。

(2) 開設科目の選択希望理由について

図3の左図はS階層とS階層以外の全体、右図は各運動生活階層の選択希望理由の割合を示したものである。

各運動生活階層で高い割合を示す希望理由は、C階層では「やったことがなく新しい体験」(21%)、「中・高校のクラブで経験した好きな種目」(18%)、「技術を高めたい」(16%)

表2. これから最もやりたいスポーツと正課体育で最も履修したい科目との関係

Club 階層	Program 階層	Area 利用階層	Stay 階層
硬式テニス (26) (13) ▲	バレーボール (8) (19) △	硬式テニス (34) (19) ▲	ライフル射撃 (3) (12) △
ライフル射撃 (2) (8) △	ハンドボール (2) (9) △	ライフル射撃 (1) (8) △	硬式テニス (23) (10) ▲
バレーボール (3) (7) △	ゴルフ (11) (7)	バレーボール (0) (7) △	ゴルフ (15) (10)
ゴルフ (8) (7)	サッカー (8) (6)	ゴルフ (9) (6)	サイクリング (10) (9)
ハンドボール (2) (6) △	バスケット (2) (6) △	野 球 (9) (6)	卓 球 (7) (7)
水 泳 (6) (6)	ラグビー (5) (6)	水 泳 (7) (5)	バドミントン (2) (7) △
サッカー (5) (6)	水 泳 (10) (6)	バスケット (3) (5)	野 球 (7) (5)
サイクリング (3) (5)	バドミントン (3) (6) △	ハンドボール (0) (5) △	ラグビー (2) (5) △
野 球 (6) (4)	剣 道 (2) (6) △	弓 道 (1) (5) △	弓 道 (5) (5)
ウォーター・フロントスポーツ (10) (4) ▲	ライフル射撃 (2) (5) △	ソフトボール (1) (5) △	バレーボール (2) (5) △
バドミントン (5) (4)	野 球 (8) (3) ▲	ウォーター・フロントスポーツ (10) (3) ▲	ソフトボール (2) (5) △
	硬式テニス (19) (3) ▲		水 泳 (8) (1) ▲
	ウォーター・フロントスポーツ (5) (3)		

※ 各階層欄の左側の () 内の数字は「これから最もやりたいスポーツ」の選択度(%) どちらかで5%以上の選
 “ 右側の “ “ “ 「正課体育で最も履修したい科目」の “ (%) 択度がある種目のみ

※ ▲はスポーツの選択度>科目の選択度 } 差が2倍以上ある
 △は “ < “ }

などで、P階層では「中・高校のクラブで……」
 (23%)、「やったことがなく新しい体験」
 (19%)、「中・高校の授業で……」(13%)で
 あり、A階層では「やったことがなく新しい
 体験」(23%)、「中・高校クラブで……」
 (18%)、「技術を高めたい」(14%)などであ
 るが、S階層では「やったことがなく新しい
 体験」(27%)、「この種目なら人並にできる」

(16%)であった。

これらの結果からC階層、P階層、A階層
 は中・高校でのスポーツ経験が選択の理由の
 大きな要素となっているのに対し、S階層で
 は「高校期からスポーツ離れが生じた⁶⁾」こと
 から、選択理由としての割合はひくい。また、
 C階層とA階層には今もっている技術をさら
 に高めたいという積極的な傾向がみられるの

〈比較対象とした種目〉

(体操トレーニング)	弓道	野球
1 陸上運動	柔道	ソフトボール
(基本運動)	10 剣道	硬式テニス
器械運動	空手	20 バドミントン
水泳	サッカー	卓球
オリエンテーリング	ラグビー	トリム運動
5 サイクリング	バスケットボール	ウォーターフロントスポーツ
ゴルフ	15 バレーボール	
ライフル射撃	ハンドボール	

※正課体育の開設科目から除外されたのは、()の科目である。

に対し、S階層では他者と比較して自分がコンプレックスをもたなくてもよいスポーツを選ぶ一面があることがうかがえる。

C階層、P階層、A階層の選択理由を比較すると割合に多少の違いはあるが、C階層とA階層は選択理由の傾向がほぼ同じであると思われる。しかし、P階層は「運動不足の解消、健康の増進」、「中・高校の授業で経験」でC階層やA階層より高い理由度を示し、反対に「技術を高めたい」では低い理由度を示す。

P階層が授業以外にプログラムという他から与えられた状況でしか運動をしないという現状をふまえてこれらの結果を考察すると、P階層はC階層やA階層に比べて日常での運動不足を感じ、椿本¹⁴⁾らが「健康、体力面での自信の程度をとして体力、運動能力はC階層、A階層、P階層、S階層の順で低くなる」と指摘するように、自己の健康、体力に少なからず不安をもつことが選択理由に連がっていると考察される。

S階層とS階層以外の全体を比較すると、S階層がより高い割合を示す希望理由は「人並にできる」、「体力、技能に劣るができそう」などで、S階層以外の方が高い割合を示す理由は「中・高校のクラブで経験した好きな種目」や「技術を高めたい」などである。

この結果にもみられるように、S階層以外は何かを高めたい、好きなスポーツを継続するという傾向がみられるが、S階層は自分に不足している面（体力、技能）が選択する科目の活動場面において障害にならないように意図し、科目を選択する傾向があることがうかがえる。

(3) 授業で期待する内容について

図4の左図はS階層とS階層以外の全体、右図は各運動生活階層の授業で期待する内容の割合をあらわしたものである。

各階層の授業で期待する上位3項目は、C階層では「楽しみの増加」(19%)、「新しい体験」(18%)、「技術の向上」(16%)、P階層では「運動不足の解消」(29%)、「楽しみの増加」(14%)、「新しい体験」(12%)、A階層では「運動不足の解消」(24%)、「楽しみの増加」(18%)、「健康の増進」(14%)であり、そしてS階層では「運動不足の解消」(32%)、「健康の増進」(13%)、「体力の向上」(12%)であった。

C階層、P階層、A階層間で比較すると、C階層はP階層、A階層より「技術の向上」、「新しい体験」などに高い期待度を示し、P階層とA階層は「運動不足の解消」により高い期待度を示している。

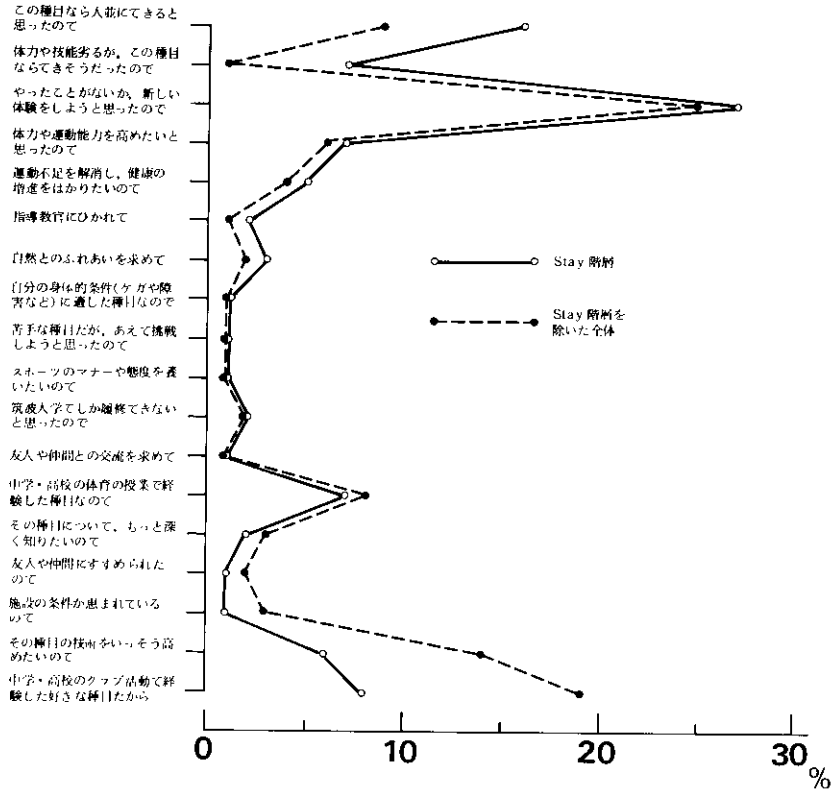
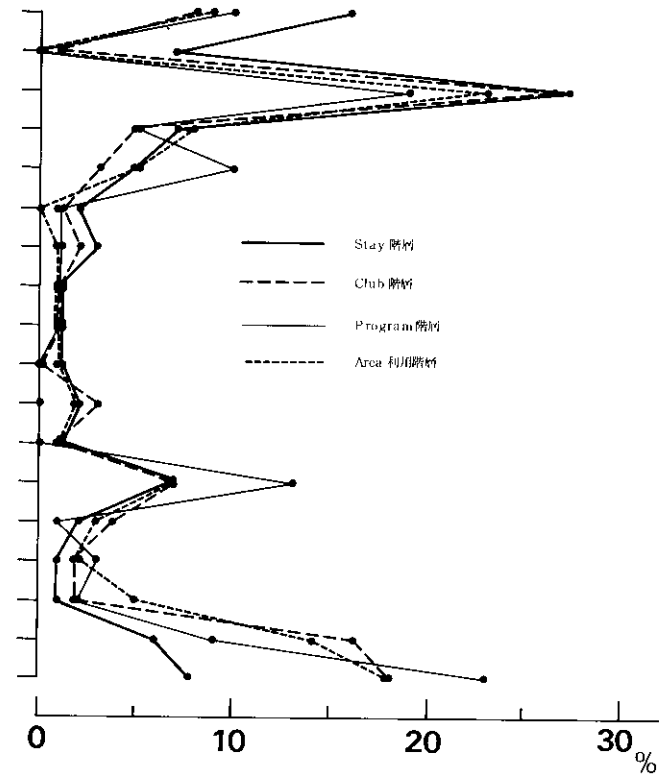


図3 開設科目を希望する理由



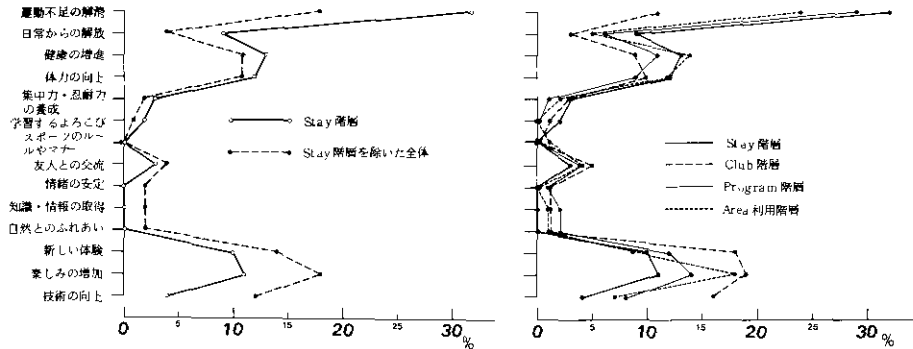


図4 授業において期待する項目

そして、S階層とS階層以外の全体とで比べると、S階層がより高い期待度を示すのが「運動不足の解消」や「日常からの解放」などで、S階層以外の全体がより高い期待度を示すが「楽しみの増加」、「技術の向上」そして「新しい体験」などである。

これらの結果より考察されることは、C階層は他の階層に比べ、まだ自分が経験していないことを体験してみたい、さらに技術などを獲得したいという明確で積極的な期待を授業に対してもっていることが把握されるが、S階層では選択した科目のもつ楽しさ、技術の獲得などを期待するのではなく、自分の日常生活で不足している運動量を授業で確保し、体力や健康の増進をはかろうという意識が強いように思われる。

P階層とA階層もS階層のように授業で運動量を補おうという傾向がみられるが、S階層が次も健康、体力という身体的な面に期待が強いに対し、両階層は楽しさという精神的な面への期待が強い。

表3は「日常やっているスポーツで満たされること」と「授業で期待すること」の割合をC階層、P階層、A階層についてあらわしたものである。S階層については、日常でスポーツをやっていないため、比較できないので除外した。

各階層において「友人との交流」や「日常からの解放」は日常での満足度の方が授業での期待度より顕著に高い割合を示すが、反対に授業での期待度の方が顕著に高い割合を示す項目は「新しい体験」とそれほど顕著な差がみられない階層もあるが「健康の増進」、「技術の向上」である。

この結果より、学生は授業に対して自分達の仲間だけでは経験したり、解決できない未知のものを（教師から）与えられることを期待していることがうかがえる。

「体力の向上」は、C階層では日常での満足度の方が授業での期待度より高い割合を示すのに対し、P階層とA階層では授業での満足度の方が高い割合を示す。そして「集中力・忍耐力の養成」もC階層では日常のスポーツで満たされる割合の方が顕著に高いのに対し、P階層とA階層では期待度、満足度も低く、差もみられない。

以上の結果に加え「楽しみの増加」、「運動不足の解消」について各階層の日常での満足度と授業での期待度および満足度と期待度の差を比較すると、「楽しみの増加」ではP階層<A階層<C階層の順で授業で期待する割合が増加し、日常で満たされる割合が低下している。しかし「運動不足の解消」ではC階層<A階層<P階層の順で授業で期待する割

表 3. 日常のスポーツで満たされることと授業で期待することの関係

Club 階層			Program 階層			Area 利用階層		
楽しみの増加 (8) (19)	△		運動不足の解消 (24) (29)	△		運動不足の解消 (26) (24)		
新しい体験 (6) (18)	△		楽しみの増加 (19) (14)	▲		楽しみの増加 (15) (18)		
技術の向上 (11) (16)	△		新しい体験 (1) (12)	△		健康の増進 (8) (14)		△
運動不足の解消 (16) (11)	▲		健康の増進 (6) (11)	△		体力の向上 (7) (12)		△
体力の向上 (14) (10)			体力の向上 (4) (9)	△		新しい体験 (1) (9)		△
健康の増進 (7) (9)			技術の向上 (4) (8)			技術の向上 (3) (7)		
友人との交流 (13) (5)	▲		日常からの解放 (13) (6)	▲		日常からの解放 (12) (5)		▲
日常からの解消 (9) (3)	▲		友人との交流 (13) (4)	▲		友人との交流 (16) (4)		▲
集中力・忍耐力の養成 (8) (3)	▲		知識・情報の取得 (4) (2)			集中力・忍耐力の養成 (3) (2)		
情緒の安定 (3) (1)			自然とのふれあい (6) (2)			知識・情報の取得 (0) (1)		
知識・情報の取得 (0) (1)			情緒の安定 (5) (1)			自然とのふれあい (5) (1)		
自然とのふれあい (4) (1)			集中力・忍耐力の養成 (0) (1)			スポーツのルールやマナー (1) (1)		
学習するよろこび (0) (1)			学習するよろこび (0) (0)			情緒の安定 (2) (0)		
スポーツのルールやマナー (1) (0)			スポーツのルールやマナー (0) (0)			学習するよろこび (0) (0)		

※ 各階層欄の左側の () 内の数字は最もスポーツで満たされる割合 (%)

” 右側の () 内の数字は最も正課体育で期待する割合 (%)

※ ▲は、スポーツで満たされる割合 > 正課体育で期待する割合 } 差が5%以上
△は、 ” “ “ “ }

合が増加し、P階層とC階層では日常での満足度と授業での期待度の差が反対になっている。

これらの結果より、C階層は日常の運動活動が運動量的、規律的には体育授業のそれよりきびしくやっているためか、授業では「楽しさ」を求める傾向が他の階層に比べ強い

ことがうかがえる。P階層はプログラムという他から与えられた運動活動を断片的にしかやっていないためか運動量の確保を授業に対して強く期待するようである。そしてA階層は日常のスポーツでの満足度と授業での期待度においては、C階層とP階層のあいだに位置づく階層と捉えられる。

(4) 授業の内容、指導方針、評価方法に対する満足度について

図5は各階層の授業の内容、指導方法、評価方法への満足度をあらわしたものである。

図に示されるようにS階層は他の階層と比べて指導方法、評価方法において満足度がひくいことが有意な差でみられた。それぞれの満足の根拠については、どのような理由によるのか、それに関連する調査項目がなかったため明らかにできないが、S階層者が「体力に自信がなく¹³⁾」、「体育の4年間の必須に満足度がひくい¹⁴⁾」ことと中村⁷⁾らが報告して

いる「大学男子学生では体力や運動技能が劣ると感じる者は大学体育の必須に疑問を感じる割合が高く、体育に低い評価を与える割合が高い」ことと一致する面があり、体力に自信がないことも一つの根拠と考えられる。

〈まとめ〉

各運動生活階層の正課体育への対応について、1268名の正課体育受講生の調査資料をもとに検討した結果、これらの対象において次のような結論をえた。

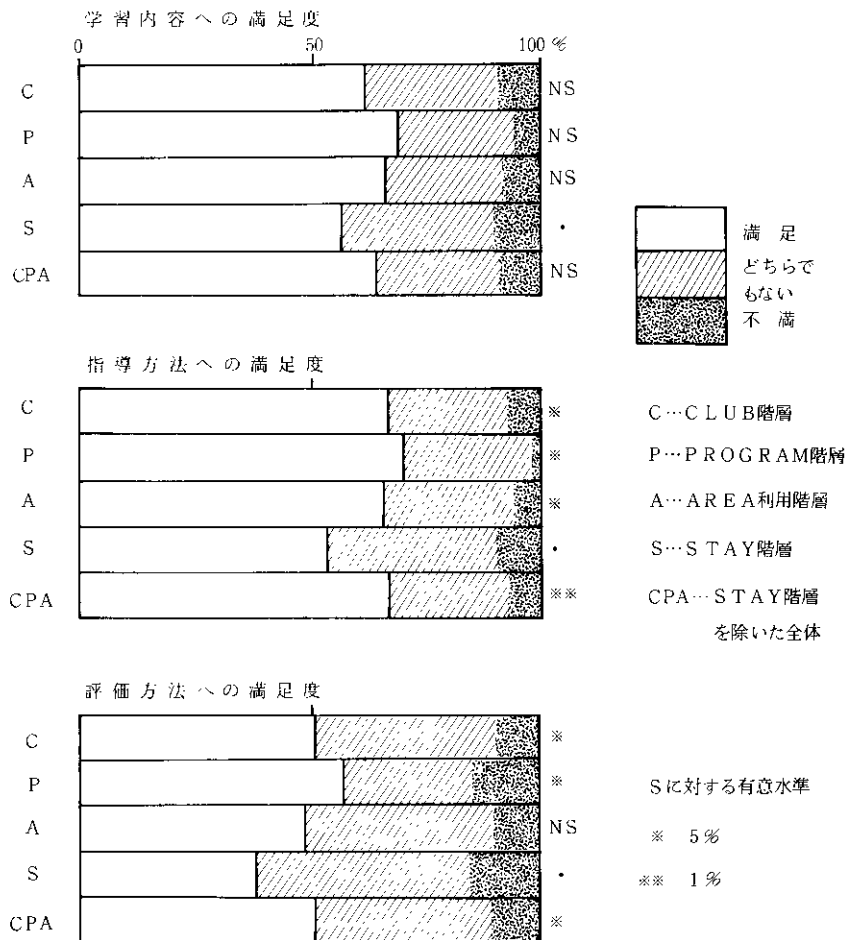


図5. 運動生活階層別にみた学習内容、指導方法、評価方法への満足度の比較

- (1) Club 階層は選択希望科目, その希望理由, そして体育授業で期待する内容などに一貫性があり, 自分が今もっている技術をより高めようとか, 体験の巾を広げようという意識や楽しさへの期待を正課体育に対してもっている。
- (2) Stay 階層は, 自分が技術面や体力面でコンプレックスを感じなくてもよく, 直接的に他とあまり競いあうことがなく, 運動量の一般的に少ない科目を希望しながら, 体育授業に対して運動不足の解消とか体力, 健康の増進を期待するという矛盾する意識, 態度がみられる。
- (3) 正課体育の履修希望科目の中で, これからもやりたいとするスポーツの選択度の合計は各階層とも約 60%であった。ライフル射撃やバレーボールはこれから日常でしたいとするより正課体育で選択する割合が高い種目である。そして一般的に球技系のスポーツには同様の傾向がみられた。しかし, 硬式テニス反対の傾向を示すスポーツである。
- (4) Stay 階層はサイクリングをこれからやりたいスポーツとしても, 正課体育で履修したい科目としても他の階層より高い選択度を示す。しかし, 水泳についてはこれからやりたいスポーツとして他の階層と同程度の選択度を示すが, 正課体育で履修したい科目としては他の階層より極端に低い選択度を示す。
- (5) 正課体育において技術を高めたいとか, 自分の経験の巾を広げようという意識や楽しさを期待する傾向は Club 階層, Area 利用階層, Program 階層, Stay 階層の順で弱くなり, 反対に運動量を確保または補いたいとする意識は強くなる。
- (6) 正課体育以外に日常で何ら運動活動を実施していない Stay 階層は日常で何らかの運動を行っている他の階層に比べて, 指導方法, 評価方法に対して不満をもつ割合

が高い。

本研究により以上のような結論をえたが, 正課体育における指導方法, 評価方法の満足の根拠, 各運動生活階層のスポーツ, 運動の実施頻度をふまえた上での考察が本研究ではなされていない。また階層が変化することと正課体育への対応の変化の関連についても明らかにされていないが, これらの点は今後の研究課題としたい。

なお, 本研究の調査集計にあたり, 国立特殊総合教育研究所の宮地力氏および筑波大学体育センターの各教官, 準研究員の方々の協力を得た。ここに記して, 感謝いたします。

(本研究の主要な部分は日本体育学会第 33 回大会に発表した)。

〈引用・参考文献〉

- 1) 浅田隆夫ら, 「正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的教育方法の改善に関する研究(4報)」大学体育研究, 筑波大学体育センター。4 : PP 105-200, 1982。
- 2) 江口篤寿, 松浦義行, 吉川和利「筑波大学生の体育・スポーツに対する意識について」大学体育教本, 不昧堂出版, 1977, PP 447-454。
- 3) 江刺正吾「学生の生活とスポーツ」道和書院, 1980。
- 4) 福岡県体育研究所「高校生の運動生活に関する調査—運動階層分布—」1982。
- 5) 九州地区生涯体育研究会「生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究」昭和 53 年, 54 年度文部省科学研究費補助金総合研究 (A) 研究成果報告書, 1980。
- 6) 宮地 力「Stay 階層の運動生活」大学体育研究, 筑波大学体育センター。4 : P 177, 1982。
- 7) 中村 誠ら「大学体育の社会的機能について—調査研究報告—」東京都立大学体育学研究, 2-1 : PP 13-17, 1977。
- 8) 丹羽劭昭, 長沢邦子, 浅井 修「女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討」体育学研究, 25-4 : PP 251-260, 1980。

- 9) 岡野崇彦ら,「大学正課体育実技の教育効果に関する研究—(5)体育実技授業に対する態度」体育学紀要, 東京大学教養学部体育研究室, 6 : PP 27—32, 1972。
- 10) 徳永幹雄, 荒井貞光「体育実技に対する態度の変容とその要因」九州大学体育学研究, 4—5 : PP 27—35, 1972。
- 11) 椿本昇三, 寄金義紀, 浅井 武「正課体育の具体的教育方法の改善に関する研究—(5)運動生活階層別にみた筑波大生の健康・体力に対する意識と運動能力に関する考察」日本体育学会第 33 回大会, P 795, 1982。
- 12) 筑波大学大学体育研究会「大学体育教本」不味堂出版, 1977, P 10。
- 13) 宇土正彦「体育管理学」大修館書店, 1970, P 133, 139。
- 14) 安ヶ平 浩ら「正課体育履修の実態とその対応」大学体育研究, 筑波大学体育センター, 4 : PP 188—198, 1982。